

8地区



役職員とその家族挙げ交通安全
管内警察署に交通安全宣言書を提出

JAふじ伊豆は、秋の全国交通安全運動にあわせて管内警察署に「交通安全宣言書」を提出しました。宣言書は当JAと関連会社の役職員・社員とその家族2,638世帯、6,939人が署名し、交通ルールとマナー順守を誓っています。

9月21日、鈴木正三組合長は沼津警察署の吉田光広署長に本店役職員分の宣言書を手渡しました。吉田署長は「交通安全宣言書は、交通安全を意識する素晴らしい取り組み。交通ルールを守り、交通事故撲滅に努めてほしい」と話しました。



吉田署長(左)に宣言書を提出する鈴木組合長

8地区



生産力向上を目指す
第1回トマトサミット開催

JAふじ伊豆は9月22日、第1回トマトサミットを伊豆の国地区本部で開きました。同地区と三島函南地区の7つの生産部会役員やJA役職員、JA静岡経済連、県東部農林事務所の職員ら36人が出席して行われ、生産力向上を目指し産地構想を協議。生産技術研さんグループの結成や同グループ活動の各部会への情報共有などが決まりました。

藤沼和明営農担当常務は「生産力の向上と新規就農者参入体制構築を実践していきたい」と話しました。



各産地の状況や取り組み、今後の展望を意見交換

三島函南



「みしまるかん」オープン
“新しい時代の八百屋”をコンセプトに

建設を進めていたファーマーズマーケット「みしまるかん」が10月26日、三島市谷田にオープンしました。オープニングセレモニーにはJA関係者が多数出席し、鈴木正三組合長をはじめ役職員や生産者がテープカットを行って開店を祝いました。鈴木組合長はあいさつで「新しい時代の八百屋を目指す。新鮮でおいしい農畜産物を届け、地域住民の皆さまとの交流拠点として活気のある地域づくりにつなげたい」と力を込めました。

「みしまるかん」は、三島の「みしま」、フランス語で市場を表すマルシェの「まる」、「かん」は函南の「函」、開けて楽しむ缶詰の「缶」、大きな建物を表す「館」を表しています。



生産者や役職員のテープカットで開店を祝う



地場産のほか物流プラットフォームで各地区の新鮮野菜も並ぶ

あいら伊豆



労働力軽減と生産量の拡大目指して
ミニトマト選果・磨き機導入

あいら伊豆そ菜部会ッキングトマト部は9月14日、伊東共選場で、来年度本格稼働させるッキングトマト「アイランドルビー」の選果・磨き機の試運転を行いました。

同機器は、意欲ある生産組織の新たな取り組みを後押しする当JAの「あぐりチャレンジ事業」で導入。労働力軽減と生産量増大が期待されます。現在の出荷量は4トンで、2025年までに1.2倍の4.8トンを目指します。

篠原憲部長は「選果機を導入することで負担が減り、栽培に専念できる」と期待を寄せていました。



選果・磨き機の稼働を確認する部会員

伊豆太陽



優良生産農家を表彰
伊豆太陽地区柑橘生産者報告会

伊豆太陽地区柑橘委員会は10月4日、稲取支店で「JAふじ伊豆 伊豆太陽地区柑橘生産者報告会」を開き、JA職員や会員18人が出席しました。

報告会では、令和3年度柑橘販売報告や伊豆東地域果樹産地再編整備協議会の優良生産農家の表彰、(株)WithFarmerの代表取締役・平戸裕馬さんを講師に招いた記念公演を行いました。

優良生産農家は、品目ごとの出荷量と品質評価をもとに委員会で決定され、9の方が表彰されました。



表彰された優良生産農家の皆さま

8地区



管内生乳生産者の乳質の高さ評価
第14回関東生乳品質改善共励会で7人と1団体が入賞



優秀賞を受賞したのは加藤徹雄さん(写真は息子の孝さん)(左)と篠原裕城さん(中央)、渡辺謹一さん(右)

8都県の生乳生産者の生乳の品質を審査し、乳業者へ新鮮で良質な生乳の供給や品質改善意欲の高揚を図ることなどを目的とする「第14回関東生乳品質改善共励会」がこのほど開催され、管内から優秀賞に3人、優良賞に4人と1団体が選ばれました。

同共励会では1,794人(団体)が審査され、最優秀賞10人、優秀賞10人、優良賞80人などが選ばれました。多くの生産者の中からの入賞は、管内生産

者の生産技術の高さがうかがえます。入賞は次の方々です。

- ▶ 優秀賞=加藤 徹雄(なんすん) 篠原 裕城(富士宮) 渡辺 謹一(伊豆の国)
- ▶ 優良賞=長田 晃一(御殿場) 古地 定雄(なんすん) 佐野 将史(富士宮) 株式会社武井牧場(なんすん) 岩城 仁(三島函南)

御殿場



御殿場ライスセンターで伊豆の国の米受入施設を有効活用

御殿場地区の御殿場ライスセンターでは、伊豆の国地区のライスセンターが老朽化で閉鎖したため、本年度から同地区の米の受け入れを始めました。

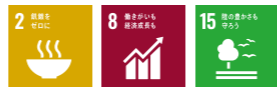
米の受け入れは「あいちのかおり」と「にこまる」の2品種のうるち米で、栽培面積は合わせて47ヘクタール分。10月11日から11月2日まで受け入れを行いました。

御殿場地区営農課の職員は「当JAの各地区が管理している施設を互いに活用し合えば施設の稼働期間も伸び、有効活用することができる」と話しました。



大型トラックで運び込まれる伊豆の国地区の米

なんすん



「きままに就農」裾野でも研修開始 白ネギ栽培に挑戦

なんすん地区本部と同管内4市町の就農プラットフォーム事業「きままに就農」の研修が10月5日、裾野市で始まりました。同市では4人の研修生を採用。最初の研修生の生出道徳さんが、指導農家から白ネギの播種を学びながら1万6,000粒を播種しました。

生出さんは祖母が農家で幼い頃から農業に触れる機会が多く、地場産品を残したいという思いがありました。「新規就農の成功例になるよう、この1年しっかりと基本を学びたい」と意気込みを語りました。



指導農家(左)から播種方法を教わる研修生の生出さん

三島函南



三島甘藷を地元企業が応援 三島甘藷の学校給食無償提供継続へ

三島函南甘藷部会は地元企業をサポーターとし、共同で事業展開を進めています。同部会は資材価格高騰により農業経営がひっ迫し、例年実施していた学校給食への三島甘藷の無償提供が困難になったことから、地元企業に支援を要請。7企業が参加し、支援金は給食無償提供の補助の他、商品開発や周知拡大事業に活用する予定です。

同部会は出荷箱にサポート企業名とロゴを掲載し、認知度向上と新たな顧客確保につなげています。



サポート企業名が掲載された三島甘藷の出荷箱

三島函南



三島牛蒡復活プロジェクト始動 かつての特産「ゴボウ」で農業所得向上

三島函南地区本部は、約30年前に三島市内で栽培されていたゴボウの生産を再開し普及させる「三島牛蒡復活プロジェクト」を始めました。

同プロジェクトでは、短根で収穫の手間が少ないサラダゴボウを採用。地域名を付け「錦田(にしきだ)牛蒡」の名で特産化を図っています。

プロジェクトの一つで、市内飲食店でゴボウ料理を提供するフェアを開きました。

生産者の宮澤竜司さんは「試験栽培では品質は上々。見つかった課題も解決に向けて研究を重ねていく」と話しました。



プロジェクトの一つで三島市内の飲食店で「錦田牛蒡」料理を提供

富士宮



各テレビ番組で「う宮～な」をPR 物価高騰の中でも適正価格と品質を維持

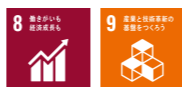
8月～10月にかけてファーマーズマーケット「う宮～な」が、静岡第一テレビ「every.しずおか」、フジテレビ「ライブニュースイット!」、静岡朝日テレビ「霜降り明星のあてみなげ」で紹介されました。

「every.しずおか」や「ライブニュースイット!」では物価高騰の中でも高品質かつ適正価格で地産地消を届けている注目の直売所として、出荷者や来店者の声と共に紹介。「ライブニュースイット!」はYouTubeの「FNNプライムオンライン」で配信されています。



「ライブニュースイット!」取材の様子 二次元コードから視聴できます(価格などは取材時のもの)

富士



県外バイヤーに富士のほうじ茶PR 商品開発などの情報交換も

JAや富士市がブランド化を進める富士のほうじ茶を県外のバイヤーに紹介する「富士のほうじ茶ビジネスフェア」が9月7日、ホワイトパレスで初開催されました。

富士のお茶振興推進協議会の会員がバイヤーに自慢の商品をPR。マーケティングや商品開発などの情報を交換し商談を弾ませました。翌日はほうじ茶に関連する施設や大淵笹場などを巡るツアーを行い、「マッチする商品があれば仕入れたい」とバイヤーからは好感触を得ました。今後の県外への展開が期待されます。



県外のバイヤーにこだわりのほうじ茶商品を説明する会員(左)

伊豆の国



母親株育成にナノバブル水製造装置 健全な親株育成体制の強化へ

伊豆の国莓委員会は本年度「めぐりチャレンジ事業」で、母親株増殖施設にナノバブル水製造装置を導入しました。同装置は、微細で浸透性の高いナノバブル(超微細気泡)が健全な根を作り、成り疲れや株疲れを回避して肥料の成分を効率よく吸収する効果が期待でき、導入により健全な親株育成体制を強化しました。

親株管理を担当する佐々木毅さんは「親株育成は順調。営農アドバイザーを通じて各生産者も装置を活用し、生産管理に役立ててほしい」と話しました。



ナノバブル水製造装置を確認する生産者と営農アドバイザー

伊豆の国



より高い技術・知識習得を目指す ワサビの育種勉強会開催

青壮年部伊豆の国地区本部南支部ワサビ専門部会は9月27日、生産技術と知識向上を目的に、ワサビの育種勉強会を開きました。講師はワサビのトップ営農指導員・日吉新課長補佐や県農林技術研究所伊豆農業研究センターわさび生産技術科の久松奨科長が務めました。

勉強会には部会員20人が参加。交配の基本的な仕組みや集団選抜の必要性などを学びました。鈴木彰部会長は「勉強会の内容を各自の経営に反映してほしい。今後も継続していきたい」と話しました。



育種について学ぶワサビ部会員たち